特110
529

落葉集

佐藤藤

正
8.8 4
交内

この書のはじめに

おさないころのかなしみは
わすれなぐさのみづあさぎ
さいてはすぐにちるこころ
おさないころのあこがれは
あゐをながしたおほぞらに
かかつてきえるにじのいろ

純なる少年の思ひ出と悲しみとあこがれとは、大方この集のなかに歌はれてゐます。たとひ生活はちがつてゐても、同じ流れに根ざす少年の心は、この詩をよんでまた同じ思ひにうたれるでせう。さきに公けにした『草笛』に、更に近作を加へてこの一巻をつくりました。著者にとつては第二の詩集です。思ひ出多く懐しい心地がします。

一九一九年の初夏　著者

目次

あこがれ……二
柘榴は實る……九
春が來るのに……一五
月は朧ろに……二一
菜の花は黄に……二七
船は歸る……三三
母と妹と……三九
あの歌聲は……

草笛

草笛……四六
若草の上……五〇
故郷よ……五四
桃の渡し……五八
秋が來たとて……六二
馬よ……六六
銀笛の悲しみ……七〇
雪の上……七四
春の土……七八

海の初日……八二
弟よ……八六
伐木……九〇
兄の便り……九四
海の子……九八
月のぼる丘……一〇二
輕業師の子……一〇六
燈臺……一一〇
赤い旗……一一四
葡萄畑……一一八

少年坑夫……一三二
永久の眠り……一三六
栗の花畑……一三〇
雪の夜……一三四
ダリヤ畑……一三八
酒倉……一四一
山焼くろ日……一四六
校舎の裏……一五〇
草の實……一五四
それは無理です……一五九

夢……一六三
家に歸ろか……一六八
谷の嘆き……一七二
母を尋れて……一八四
渚の別れ……一九六
かきつばた……二〇五
逃げた小鳥……二二二
裝幀……森田ひさし

あ
こ
が
れ

大正七年七月より
大正八年四月まで

柘榴は實る

さらさらと吹く夕風に
何か心のたよりなさ
土藏のかげに來てみれば
柘榴は實るくれなゐに

姉が嫁いだその日から
父と母とたのぞいては
私ひとりの家のうち
何か心のたよりなさ

姉は嫁いでゆく晩に
私の肩に手をかけて
「歸らぬわけでないけれど

しばらくこれがお別れよ
私がゐなくなつたなら
きつと淋しい事でせう
けれども一度は父母の
家をはなれてゆくならひ
丈夫で暮して下さいよ」
島田に結つた黒髪に

さした簪の金の鎖
銀の灯影にくつきりと
雛の姿をふるはして
物悲しげに言つた顔
眼には涙をためてゐた

ひとり寢床に眼覺めると
縁側傳ひ姉が來て

起してくれそに思はれる
父に叱られしょんぼりと
柱に凭れてゐる時は
いつものやうに姉が來て
宥めてくれそに思はれる

黍の廣葉がさらさらと
夕べの風に鳴るころは

たよりあるようなないやうな
人に言はれぬ心もち

去年の秋は病らつて
床についてた兄が逝き
今年の秋はなにくれと
世話してくれた姉が行く
一人二人とこの次は

誰に別れることだやら

歩むともなく來てみれば
土藏の壁の夕濕り
濕る瞳に映りつつ
柘榴は實るくれなゐに

春が來るのに

春が來るのにただひとり
松葉杖つきただひとり
林のなかにわけ入れば
枝と枝とが抱き合つた
木立の中をあちこちと

くぐりぬけつつ小鳥らが
聲はりあげてほがらかに
春、春、春とうたつてる

幼ない時に片足を
なくしてからといふものは
不自由ながら松葉杖
杖にすがつて歩く身の

人にしられぬうき思ひ
何くれとなく世話されて
ひとり頼りにした兄も
いまはるばる都ゆき

白いシャツに白い靴
若草の野をかけめぐり
空から落ちてくるボール

うけて見たらば樂しかろ
雪をいただく山越えて
都の街を思ふさま
歩いて見たら嬉しかろ
みんなかなはぬその願ひ

一冬雪につつまれた
林の中の切株も

温い光りにそだてられ
枝をのばそと春仕度
幹を切られた樹でさへも
青青と芽をふくものを
まして人の子の春が來て
胸がもえずにゐられよか

林のなかの日溜りに

もえる心を胸のうち
じつとおさへて見上げれば
春來る空のみづあさぎ
鳥であつたら羽搏ちして
心まかせに飛ぶものを
春が來るのにただひとり
松葉杖つきただひとり

月は朧ろに

赤い灯を背にうけて
じつと坐つてゐる時は
春の溫味がいつとなく
足から背へほのぼのと
何か知られどなやましい

人に言はれぬ心持ち
ひとり庭へと出て見れば
月はおぼろの春の宵

踏めば大地はしつとりと
露をふんでやはらかく
こんな夜には若草の
丈もずんずんのびるだろ

こんな夜には忘れてた
人の姿も思ひ出し
何處かで誰か待つてそな
何處かで誰か呼んでそな

隣の窓にあかあかと
あかりはついてゐるけれど
一人娘の君ちやんが

お嫁に行つたそのあとは

話聲さへ聞えない

ほほにえくぼをよせながら

話を聞かせて呉れた人

その面影もうかび來る

遊び仲間の秀ちやんが

奉公にやられるその時に

いやだと言つて泣きながら

僕は奉公に行つたとて

すぐに歸つて來てしまふ

さうして君と遊ばうよ」

二人かうして別れたが

たつた一度も便りない

別れたものはなつかしく
消えゆくものは美くしい
茶碗の底をするやうな
遠い蛙の聲聞いて
しみじみ思ふおぼろ月
今は見えない人たちが
何處かで待つてゐるやうな
待たれるやうな春の宵

菜の花は黄に

走れ、幌馬車、一息に
丘を越えたら白壁の
はるかにつづく僕の村
お山の雪が日に溶けて
うつらうつらと流れたが

菜の花が黄に咲く中を
紫紺の帶を投げたよに
春の流れが縫うて行く

去年都に旅立つと
人に別れた野の路に
今日も飛んでる蝶の群
暫くここに歸らぬと

心定めて出たものの
知らぬ他國に病む身には
生れた土地が戀しくて
いま父母の家へ行く

鳥が塒にかへるよに
歩み疲れた旅人は
一夜の宿に身をやすめ

病に疲れた人の子は
心おきないふるさとへ
草の匂ひと地の匂ひ
清く漂ふ野の中に
身を健かに歸さうと

空のみしりにとけるまで
一すぢのぼる揚雲雀

何處を見たとてのんびりと
春は笑つてゐるけれど
馬車にゆられてふるさとへ
ひとり歸つて來る心
嬉しいやうなそれでまた
悲しいやうな胸のうち

疲れた身には空の色

水の色さへしたはしく
馬車の窓からはるばると
胸をひろげて見渡せば
みな思ひ出になつかしい
故郷の村、父母の家へ
帰りを待つてゐるだらう
走れ、幌馬車、一息に

船は帰る

長い一日暮れかけて
みどりの色の草原に
紅い林檎が落ちろよに
空に動かぬ春の日が
きんきらきらら輝いて

青い波間に落ちてゆく
きんきらきら輝いて
春の夕日が落ちてゆく

何時引揚げておかれたか
牛ばは砂に埋まつた
破れた船の船腹に
背を持たせてしみじみと

父の歸りを待つこころ
後れて咲いたたんぽぽの
貝にまじつて淋しそな
黄色の花のうす笑ひ

青い波越え波越えて
船が渚にかへるころ
ひつそりとした濱邊には

たくさん人が走り出て
何かののしり騒ぐ聲
獲物のあつた嬉しさも
無事で歸つたよろこびも
みんな一しよに騒ぐ聲

渚の砂のさくら貝
二つの殼を閉ぢ合せ

夢を結ぼとする頃に
歸らぬ船を待ちこがれ
今日は來るかと船腹の
冷たい蔭に身をよせて
夕日のそそぐ波の上
白帆を見れば父戀し

昨夕來て見て今日も來て

明日も明後日もここに來りや
父のみ船はくるだろか
沖の果からくるだろか
赤い夕日の波越えて
船はくるくる萬くる中で
私の待つのはただ一つ
たつた一人の父の船

母と妹と

柿の梢に百舌鳥が來て
高高と鳴く時が來た
夕日をあびて病葉が
地に舞ひ落ちる時が來た
墓に冷たく埋もれた

返らぬ母と妹を
二人残して見も知らぬ
土地へ旅立つ時が來た

ついこの三年前までは
町から町へ行く道の
たつた一つの宿場とて
人の通りも數繁く

町へ往來の馬車の音
馬車のラッパは朝霧の
こめる頃から夕月の
のぼる頃まで鳴つてゐた

ところが山を切開き
鐵道線路が出來てから
人の通りは稀れになり

何時とも知らず街道に
馬車の姿も見えなけりや
ラッパの音も聞かれない
並木の路を白白と
ただ風ばかり吹きすぎる

軒を並べた店店も
日毎空家になつてゆく

今は父さへ思ひきり
ここをはなれて賑かな
町へ移ろといふ話
町に移るはよいけれど
妹と母の墓二つ
こゝに残して行かれよか

家を見下す丘の上の

銀杏のかげに立ち寄れば
夕日をうけてくるくると
あれ金の葉が舞ひ落ちる
落ちる金の葉身に浴びて
しみじみひとり眼閉づれば
冷たい土に埋もれた
妹戀し、　母戀し、

あの歌聲は

父母在すふる郷の
家戀しさにはるばると
ひとり尋れて來てみれば
暮れ行く秋の夕風に
垣根の際のコスモスの

後れて咲いた紅い花
頼りないよに淋しそに
西へ東へゆれてゐる

子のない爲に伯母の家に
貰はれて來たこの體
伯母は親身の母のよに
情けをかけてくれるけど

何不自由もないやうに
世話を燒いてはくれるけど
我儘言つたふる郷の
家がやつぱり懐しい

垣根を越えて聞えくる
鈴をふるような歌の聲
窓に凭れて妹が

歌ってゐるに違ひない
久久で聞くあの歌に
心も身をもうち忘れ
妹とよんで見たいけど
會つて話をしたいけど

「向うの家に行つたなら
向うの人となるのです

伯母の許しがないうちは
ひとりで來てはなりません」
貰はれて行くあの時に
かたく言はれた戒めを
父に聞かれて何と言はう
母に聞かれて何と言はう
風の吹くたびコスモスの

花にとまつた赤蜻蛉

ゆり落されてくるくると
どこに止まろと思案顔
思案にくれる晩秋の
とんぼのやうな心持
家にはひろか歸らうか
いつか夕日が落ちかかる

草笛

大正六年六月より
大正七年四月まで

草笛

暮れ行く春のうすれ日に
さ青の麥の穗を拔いて
ピロロ……と吹けば懷かしい
雲雀もつばさ收めてか
聲も聞えぬゆふぞらに

ピロロ……と吹けば懷かしい
學校へ通ふ朝夕に
菜の花の咲く道越えて
麥の畑をゆくときは
友と一緒に吹き鳴らし
夢みるやうな事ばかり
話し合うたも二年前

父や母には知れぬ様に
友の合圖の草笛に
こつそり家を抜け出して
遊び暮したこともある
叱言を言つて呉れた母
その母さへも今はない

麥の穗先を黃に染めて
春の夕日が落ちてゆく
月の昇るも間もなかろ
昇つた月が沈むまで
この草笛を吹いてたら
昔の私になるだろか

若草の丘

青々のびた麥のうへ
朝の冷たい風がゆく
鍬を手にした私の
顏のあたりを吹いてゆく
今日もかうして野に立てば

別れた友を思ひ出す

西の山脈眺むれば
嶺に殘つたまだら雪
まだら雪越えはるばると
都の空にあこがれて
偉くなるよと言殘し
別れて行つた友もある

岡ふに見えるあの丘は
いつのまにやらうすみどり
みどりの草に寢轉んで
父につれられ南の
國に移るといふ友と
別れ惜んだ事もある

友はさまざま變るけど
私ひとりは變らない
鍬がざくりと黒土に
深く喰ひ込むその時に
私はいつも思ふのだ
誰が一番たのしかろ

故郷よ

一歩踏んでみかへれば
土蔵の陰の柘榴の實
ほたほた熟れて葉がくれに
赤く此方を向いてゐる
毎年たべる柘榴の實

名残惜しげに向いてゐる
二歩踏んてみかへれば
赤い夕日にはたはたと
子鳩の群が巣にかへる
子鳩でさへも巣は懸し
況して人の子ふるさとが
なんで懸しくないだろか

三歩を踏んでみかへれば
麦の畑にうごく影
あの影こそはこっそりと
姉がわたしを見送って
健全で暮して下さいと
涙ながしてゐるのだろ

一歩ふんで行くごとに
赤い柘榴も黍畑も
姉のすがたも遠ざかる
生れた家を後にして
いつまた此處に歸るやら
いつ歸るやら、故郷よ

桃の渡し

昨晩の雨にはらはらと
こぼれた桃の花ふんで
來るともなしに川べりの
渡し近くに來てみれば
水の流れの藍のいろ

舟はゆらりと浮いてゐる
遠くの國へ移られる
もと受持の先生と
名殘惜しんだその時も
桃はやつぱり咲いてゐた
別れの際に先生は
私の肩をうちながら

「君が學校出たならば
村に居つては駄目ですよ
僕がかうして一生を
小學教師で送るのも
意氣がなかつた爲ですよ
きつと決心し給へ」と

勵ましくれたあの言葉
今も忘れはしないけど
父の許さぬ事ゆゑに
心にあせつてゐるばかり
桃の渡しに來てみれば
あゝ水のみが流れゆく

秋が來たとて

廣い世界に秋が來た
秋が來たとて何になる
家に歸れる譯ぢやなし
木の實をとれる譯ぢやなし
母と二人の淋し居に

秋が來たとて何になる
風に誘はれいつとなく
もとの屋敷へ來てみれば
家もお庭も作りかへ
昔に變るうつくしさ
去年登った柿の木に
黄いろく柿が熟れてゐる

父の不圖した病ひで
他人手に渡した家なれど
こんな立派になつたのを
あの世の父がみたならば
昔のことを思ひ出し
嘸お歎きになるだらう

「偉くなれよ」のみ言葉は
胸に響いてゐるけれど
何時そのやうになれるやら
もとの屋敷の塀越しに
柿は赤々實つたが
あゝいつ偉くなれるやら

馬よ

馬よ、休めよ、草原に
空を仰げば日は赤い
暮れるまでには間があらう
家に戻るにやまだ早し
仕事をするにや時がなし

馬よ、休めよ、草原に
曉のみ星が消えぬうち
僕を乘せては野に歩み
宵のみ星が光るころ
僕を乘せては家に行く
親しい友と思ふのは
馬よ、お前の外にない

丘の上から眺めると
僕等が植ゑた二町歩の
稻は青々葉を伸ばし
涼しい風に吹かれては
夕日のなかにちらちらと
紅をつけたり落したり

僕はこれから焦らずに
土を耕す身となつて
時を待たうと思ふのだ
馬よ、お前の脊に乘つて
野の紅路を幾かへり
時の來るまで何時までも

銀笛の悲しみ

羊よ、羊、聞いとくれ
今夜わかれの銀笛の
悲しい唄を聞いとくれ
私があした山越えて
遠くの國へ行ったなら

もう笛の音は聞かれまい
可愛いお前をこの山に
置いて行きたくないけれど
牧場も家も明日かぎり
知らない人の手に渡し
生れた土地を後にして
町へ追はれる時だもの

去年の暮れに父さんは
あゝした病で死別れ
めつきり老けた母さんと
妹と三人この家を
去らればならぬ私達
お前も知つてゐるだらう

私が居なくなつたとて
育てる人はあるけれど
かういふ月のよい晩に
笛を吹いては呉れるまい
羊よ、羊、聞いとくれ
悲しい別れのこの唄を

雪の上

鐘が鳴る鳴るまつしろに
降りつむ雪の野を越えて
夕べをつげる鐘が鳴る
行手をみればひとすぢの
路ははるばる盡きもせず

わが故郷はまだ遠い
思はぬ今朝の便りには
「ふとした風邪がもとゝなり
母は病の床につき
はげしい熱の間にも
遠くはなれたそなたをば
夜晝おもひつめてゐる」

こんな便りがなくてさへ
歸ろと思つてゐた矢先
百里の道を汽車にのり
思ひ出多い停車場に
降りた頃には日が暮れて
雪がちらちら降つて來た

心ばかりは焦つても
道はさつぱり捗らず
故郷まではまだ遠い
鐘が鳴る鳴るまつしろに
降りつむ雪の野を越えて
ゆふべをつげる鐘が鳴る

春の土

廣々晴れた青い空
空の光りを浴びながら
畑の中に素足して
大きな鍬をうちふれば
鍬はきらりと日に光り

心も躍る身も躍る
踏めばふつくり彈みそな
畑の土のやはらかさ
ざくりざくりと鋤きかへす
音のしみ入る心よさ
土の底から湧いてくる
春の温味がかゝりそな

鍬を杖つきつくづくと
林の中を行く汽車の
白い煙りを眺めては
街に出たいと思ふけど
僕はもとから土の人
やつぱり土がなつかしい

空を仰げば揚雲雀
みどりの中に鳴いてゐる
雲雀の唄を聞きながら
土を耕すよろこびを
胸につゝんで鍬をふる
僕はもとから土の人

海の初日

白い眞砂をさくさくと
綉づたひに來て見れば
いまゆらゆらと日がのぼる
家は壞れて船もない
淋しい濱の一村に

いまゆらゆらと日がのぼる
思ひ出しても怖ろしい
去年の秋の大あらし
家が流れるそのときに
父もひとりの妹も
寄せくる波に逃げ後れ
今に行方がわからない

青い波路に浮いてゐる
白い鷗の群みても
かへらぬ父や妹の
み魂のやうに思はれて
涙にくれるみなし兒に
春が來たとて何になろ

去年の樣に皆なして
初日拜みに來たならば
どんな樂しい事だらう
年が明けても家一つ
船一つない砂濱に
初日ばかりがあかあかと

弟よ

許してお呉れ、弟よ
可愛いお前に一言も
別れの言葉いはないで
家を去りたくないけれど
家を去られねばならぬわけ

お前も知つてゐるだらう
私はこれから遠い國
見知らぬ人の中へゆき
苦しいことも悲しみも
奉公する身とあきらめて
心を磨き身を磨き
人にならうと思ふのだ

一つの菓子も半分に
分けて食べ合うた仲だもの
いざ別れるとなつたなら
互ひにつらくなるだろと
こつそり私は出でゝ行く
許してお呉れ、弟よ

あゝ暁の鳥が鳴く
また幾年か經つてから
家に歸つたその時は
夜の明けるまで語らうよ
別れを惜しんで呉れるよに
あゝ暁の鳥が鳴く

伐木

はらはらと散る朝露に
草履ぬらして裏山を
のぼってゆけば木の間から
木を伐る斧の音がする
ほんのり罩めた朝霧の

まだ晴れきらぬ木の間から
一斧ごとにゆら〳〵と
幹をふるはす杉の木の
梢仰いで父はいふ
「お前が遠くへ出るといふ
望み叶へてやるために
この山の木を伐るのだ」と

いつか伐り出す時がくる
さうは思つてゐたものゝ
今日の今日とは知らなんだ
わが子のためといひながら
村にひゝいた杉山へ
斧を入れるは辛からう

父は無言で梢見る
僕も無言で梢見る
霧がうつすり立罩めて
鳥も鳴かない明方の
しんと靜かな裏山に
たゞ斧ばかり丁々と

兄の便り

都へかへる兄さんが
僕と別れをした頃は
蕾は枝に小さくて
開きさうにもなかつたが
何時の間にやら桃の花

うす紅に咲いてゐる
明日かへるといふ晩に
月の光りを浴びながら
堅く凍つた土踏んで
この桃畑に來た時に
僕も一緒に行きたいと
無理に願つて見たけれど

考へ深い兄さんは
そんなに急ぐ事はない
秋になつたら向ふから
手紙を寄越してあげるから
それまで待つてゐなさいと
宥める様に言つてゐた

秋と言つたらこの花が
大きな桃の實を結び
枝も撓はに熟れるころ
兄は便りを寄越すやら
花は慥かに實となるが
兄は便りを寄越すやら

海の子

高い帆柱くるくると
めぐる鷗の白翼
落ちる夕日が紅染めた
白い翼に紅染めた
日が暮れるのも間もなかる

船の汽笛が鳴ってゐる
積荷の上に腰かけて
渚の方を見渡すと
松原越しのわが家に
夕餉の煙が立ってゐる
煙もしばらく見詰めて
明日は沖へと鯨捕り

うす薔薇色の朝明けに
白い大きな帆を張れば
帆は潮風にふくらんで
みどりの波の上をゆく
みどりの波をはるばると
鯨の潮の見えるまで

父も私も同じこと
海に生れて海に死ぬ
狹い陸地に家はない
遠く聞える唄聞けば
「船頭する身と空飛ぶ鳥は
末は何處で果るやら」

月のぼる丘

青い夜空に銀色の
月がぽつかり浮き出した
野茨の花がほの白く
露にしめつて咲く丘を
ひとり歩めば長々と

芝生に落ちる黒い影

いつも寝轉ぶ草に來て
月の光りに濡れながら
自分の好きな尺八を
吹けば吹くほどしみじみと
去年別れた先生の
あの面影を思ひ出す

覺えはじめたうれしさに
丘にのぼつて吹いてると
あの先生がこつそりと
後ろに立つて聞いてたが
一曲吹いて下すつた
その節奏のうつくしさ

今は便りもないけれど
月のある夜は同じこと
吹いて居られることだらう
夜露にぬれた草原に
人なつかしのばばほのぼのと
月はみ空へのぼりゆく

輕業師の子

赤いシャッツに赤い帽
きらきら光る靴穿いて
輕業小屋で踊るのも
親方の眼が怖いため
いつそ逃げよか逃げたとて

誰を頼りにしよもない
何にも知らぬ幼兒で
貰はれて來た身の上は
父もなければ母もない
水に浮んだ浮草が
流れのまゝに動くよに
町から町へ渡りゆく

白い粉雪ちらちらと
寒さ誘うて降る宵も
からりと晴れた青空に
櫻の花が舞ふ晝も
赤いシャツを身につけて
舞臺の上をはれ廻る

あぶない藝はやめにして
自由な軀になりたいと
毎日願つてゐるけれど
許して呉れる筈がない
いつそ逃げよか逃げたとて
誰を頼りにしよもない

燈臺

燈臺の灯がまた點いた
眞赤な長い帶の樣に
渚に寄せる夕波も
一度は退いてまたもとの
岸に戻つて來るけれど

私の父は歸らない
思ひもよらぬ暴風が來て
船と一緒に父樣も
行方知れずになつてから
月日の經つのは早いもの
もう一月になるけれど
生き死さへもわからない

嶂に聞けば帆柱や
船の破片が流されて
隣りの濱に着いたとか
さうして見れば父様は
あの大波に呑まれたか
海の深底に沈んだか

無心に聞いた濤の音も
今日は悲しい唄の聲
一人で濱にゐたとても
何の樂しい事があろ
あゝ燈臺に灯が點いた
けれども父は歸らない

赤い旗

眞赤な秋の太陽が
くるくる西に沈むのに
くるくる山に沈むのに
私は旗を振つてゐる
鐵道線路の踏切で

青と赤との旗をふる
姉が遠くに行つた時
私の姿に眼を止めて
「さよなら健全でお在よ」と
汽車の窓から顔出して
涙ながらに言うたけど
今はどうしてお在やら

都に上る友達が
風に吹かれて立つてゐる
貧しい私の姿みて
汽車の窓から冷やかに
笑つて過ぎたこともある
笑はれたとて何である

家にお在の母様や
妹のことを思つては
嘲られたり笑はれる
言葉を聞いてゐられない
青と赤との旗ふれば
あゝくるくると日が沈む

葡萄畑

露がこぼれる葉を分けて
紫色につぶつぶと
熟れた葡萄を手の中に
握りしめれば懐かしい
つめたく指にふれるさへ

楽しい秋を思はせる

今年は蟲もつかないし
暴風も幸ひ來なかつた
鋏手にして葉蔭から
一房づゝを切り落す
皮が破れてむらさきの
汁がいまにも滴れさうな

花がひそかに咲く頃は
いつ實になると思うたが
うつかり遊んでゐるうちに
こんな大きな實になつて
見渡す限り畑には
甘い匂ひが流れてる

車につんで幾籠も
町の市場へ引いてゆく
僕等の畑の果物が
生々店へならぶとき
そのよろこびを誰が知る
僕等の外に誰が知る

少年坑夫

時がめぐれば坑内の
汚ないトロの中にのり
幾百尺の地の底へ
皆と一緒に運ばれて
冷たい岩に向っては

今日も今日とて金を掘る
仄かに點るカンテラの
光りたよつて鶴嘴の
重い柄を振るその時も
明るい空や鳥の聲
生々とした人のすむ
かなたの國を思ひ出す

春がめぐつて來たとても
赤茱に禿げた鑛山は
うすいみどりの色もなく
硫黄の煙にどんよりと
眠つたやうな大空に
ダイナマイトの音がする

山を見に來る私等と
同じ位な學生の
旅の姿をながめては
貧しい私をふりかへる
ダイナマイトの音をきき
今日も今日とて金を掘る

永久の眠り

夜明けを告げる鐘の音が
起きよ起きよと鳴るけれど
弟は永久に眼覺めない
冷たい床に横たはり
疲れ入つたやうな眼のふちの

黒い睫毛も動かない
顔には何の苦もなくて
肩をゆすつてやつたなら
いつもの樣に眼をひらき
清しい聲で「兄さん」と
呼んでくれそに思へるが
今ではそれも叶はない

死ぬのを知つてゐたならば
祭に行かうと云つたとき
一緒に連れて行つたもの
私の持つてた寫眞機を
欲いと云つたあのときに
やつてしまへばよいものを

熱に浮かされ「兄さん」と
幾度も呼んだあの聲を
思ひ出してはなほさらに
返らぬ悔にせめられる
起きよと鐘が鳴るけれど
弟は永久に眼覺めない

菜の花畑

姉の洋傘は青いいろ
父の帽子は赤茶いろ
二つ並んで菜の花の
黄いろく咲いた道をゆく
春のみどりの空はれて

心もとける日の中を
昨晩町から人が來て
他所へ奉公にゆく事に
姉がきまつたその時は
顔へ兩手を押し當て、
赤い灯に身をそむけ
何か悲しく泣いてたが

今日はあのように仕度して
父と一緒にゆくからは
奉公に出るを承知して
昨晩の人の家へゆき
身を砕かうと健氣にも
心さだめてゐるのだろ

送られる人送る人
互につらい事だろが
麥の上から脊をのべて
別れの聲もかけられず
菜の花みちに消える影
見送る私はなほつらい

雪の夜

雪は降る降る眞白に
この戸一枚開けたなら
戀しい母や妹に
逢へると知つてゐるけれど
思はぬ私の姿みて

何と被仰ることだらう
使はれる身と言ひながら
あまり辛さに堪へかねて
一つは母の戀しさに
主人の家を後にして
雪が降りつむ夜の道を
家の前まで來は來たが

「可愛いお前を世の中の
旅に出すのも家のため
堪へてくれ」と母様が
別れの際に被仰つた
あのお言葉を思つては
今更家に入れよか

小犬も親に抱かれて
寢たのか聲も聞えない
私ひとりが雪の上
主人の許へも歸られず
思ひ惑へば夜は更けて
雪は降る降る眞白に

ダリヤ畑

花を切らうと朝早く
ダリヤ畑の中ゆくと
紅や紫うすきいろ
露がこぼれる葉の陰に
人の近寄る氣配して

「坊ちやん」とよぶ女聲
呼ばれて後ろを振向くと
乳母がにつこり立つてゐる
「今日はお宅へ伺つて
大きくなつた坊ちやんの
お姿見たく來ました」と
何時も變らぬ話振り

乳母は四五年前までは
母にかはつて何くれと
私の世話を焼いた人
お嫁にいつた先からも
しばしば手紙を寄越したが
一度も尋れて來なかつた

乳母のかたへに寄添つて
母親にでも逢ふ心地
「よく來てくれた」といひながら
嬉し涙にくれてゐた
紅や紫うすきいろ
露がこぼれるダリヤ畑

酒倉

黄いろい麥がぶすぶすと
風に吹かれてゆれる頃
倉の隅には麥藁が
山ほど高く積み込まれ
蔗を敷いたその上は

僕等の遊び場所だつた
酒屋の娘は十三で
年にはませた女王振り
隣りの塀から覗いてる
まだ色づかぬ梅の實を
こつそり竿で落しては
倉にかくれて食べたもの

倉の中には酒つくる
十抱もある大桶が
幾つも高く立ち並び
冬の一月二月には
酒つくりする男らの
唄が毎日聞えてた

一緒に遊んだ友達は
大抵こゝの村を去り
酒屋の娘もこの春に
隣りの町へ縁付いた
倉のあたりに來てみると
たゞ麥ばかり熟れてゐる

山焼くる日

コバルト色の冬空に
くつきり浮いた高い山
山の半にむらむらと
白い煙りが立つてゐる
毎年冬にあるやうに

山が焼かれてゐるのだろ
麓の村であの友と
別れを告げた夕ぐれも
山は赤々焼けてゐた
柵に凭れて物言はず
煙をながめた白い顔
今もはつきり眼にうつる

「君は向ふに行つたなら
また友達が出來やうが
淋しい村に殘された
僕は一人でゐるのだ」と
眼をうるませて言ふ友に
思はず泣いたあの別れ

もう一年になるけれど
友は便りを寄越さない
病の床についてるか
遠くの國へ行つたのか
山の燒けるを見る度に
別れた友の身を思ふ

校舍の裏

晝の休みになつた時
青い表紙の教科書を
枕に敷いて枯草の
日向に僕はれころんだ
雲一つない冬空の

コバルト色を見てゐると
僕の軀はかろくなり
そのまゝ空へ揚げられた
夢の心地に何處からか
僕の嫌ひな數學の
答を求める者がある
僕は知らぬと言切つた

「こんな答ができぬなら
天上界に置くことは
罷りならぬ」と聲あつて
僕は空から落された
はつと思つて驚くと
皆んながそばで笑つてる

午後の學課を一時間
夢ですごした思ひ出よ
校舍の裏の日溜りの
あの枯草にれてみたい
草の實の散る音聞いて
あゝもう一度れてみたい

草の實

名知らぬ草の黑い實が
秋の入日に散るときに
學校の庭の片隅で
友は私にかう言つた

「僕はいよいよ明日から
學校を止めてしまふのだ
君とも永いお別れだ
別れはしたくないけれど
今となつては仕方ない
僕は見知らぬ國へ行く」

「お互別れたくないが

見知らぬ國へゆくならば
うんと奮發したまへよ」
僕の言葉た友はきゝ

「僕はかうして居たいな」と
何か考へ込んでゐる
「君、考へる事はない
この大空を見給へな

空が覆うてるその限り
土と水とは果しない

土と水とのある處
人は仕事が出來るのだ
何處へ移つて行つたとて
僕等た容れる土地はある

廣い世界に生れ來て
何も悲しむ事はない」
はげます僕の言葉き、
見る見る友の眼には
希望の色が輝いた
草の實の散る夕ぐれに

それは無理です

父さん、それは無理ですよ
草に醫へて御覽なさい
同じ土から生えたとて
肥料がよければずんずんと
他を追越し根も張れば

堅も太々肥えますよ

第一夏になつたとき
大きな花を開くのは
どの草でせう堅でせう
それは性質にもよりますが
いじけて育つた草花が
なんで大きく咲きませう

いくち若芽を摘んだとて
春の時節であるならば
根のある限り芽ぶきます
春が來たなら上に伸び
花をつけるといふことは
生きてるものゝ心です

僕に肥料をして下さい
上の學校に入るなり
獨り勉强してるなり
僕の自由にして下さい
伸びる若芽を押へよとは
父さん、それは無理ですよ

夢

昨晩たかしな夢をみた——
庭にぼんやり立つてると
白い衣を着た人が
木陰で僕を呼んでゐる

呼ばれるまゝに近寄ると
思ひがけない母の顔
蒼い色して何事か
思案に暮れてゐる様子

僕がびつくり「母さん」と
袖に縋ろとしたときに
白い衣はふはふはと

後ろを向けて駈け出した

僕はあとから追駈ける
白い衣は逃げて行く
野原を越えて川越えて
高い崖まで追詰めた

母の軀は石のやう

堅く冷たくなってゐる
僕はびっくり聲あげた
あげた拍子に眼が覺めた

昨日白地の浴衣着と
「歸り」を待つといふ手紙
郷里の母から屆いたが
それで惡夢をみたのだろ

柱暦をしらべると
休みの日まで二十枚
剝げばその日になるのなら
一度に剝いでしまひたい

家に歸ろか

空を半分明るく染めて
夏の夜中も都は眞晝
青い火花の散る街通り
深い木立の公園へ來れば
今朝の手紙がまた氣にかゝる

家に歸ろか都に居よか

「父もめつきり弱つた上に
家の仕事をする人がない
折角京へ出たお前には
離れ難いと思つてゐるが
早く此方へ歸つて來い」と
何度讀んでも文句は同じ

家も人手がないのであるが
僕も今更困つてしまふ
漸く父に願つて來たに
わづか半年都に住んで
またも家へと戻つたならば
此度出て來る日も分らない

どうしやうかと氣が氣でなくて
誰も居らないベンチに凭れ
遠く聞える電車の音と
池の噴水ふきちる音と
聞けば聞くほど都にゐたい
家に歸ろか都に居よか

谷の嘆き

山で一日日を暮らし
ピスと一緒に谷かげの
家へ戻って來てみると
座敷の中に鏡臺や
箪笥が積れその傍に

姉がしょんぼり立ってゐた
姉は去年の春の頃
麓の町へ嫁入って
そこで暮してゐる筈を
いま歸るとはわからない
僕はこっそり母上に

そうした譯か聞いてみた
「富分家にゐるのです」
母はこれきり語らない
此度は姉に聞いてみた
姉はだまつてゐる許り

何時も元氣な父までが
沈んだ顏をしてるので

なんだか家のうちそとが
小暗い樣に思はれた

ある朝姉は二人して
散歩に出やうと言出した
家をはなれて見上げると
春のみ空のみづあさぎ
峯から谿へいちめんに

光りながれて懐かしい

谿の大きな岩角に
二人は腰を下したが
流れる水をみながらに
姉は静かに語るやう

「もう姉さんはいつ迄も

町の家へは帰らずに
一生此處にゐるのです
向ふの家が此方より
立派な暮しをしてたのが
不幸を招くもとでした」

母が語らぬその訳も
父の沈んだその訳も

はじめて僕に解せて來た
僕は口惜しくなつて來た

「この世の中に姉弟は
お前とわたし二人きり
頼みにするはお前だけ
二人仲好く谷かげの
家に一生を送らう」と

姉は涙をのんでいふ

けれども僕は厭だつた
「姉さん僕は出世して
家を嗤つた人達を
見返してやる積りです」

「立派な人になつたとて

情を知らぬ人達の
中に雑つてゐることは
楽しいものでないことよ」
さう言ふ姉の心持
それが僕にはわからない

谷を流れる水でさへ
海へ海へと急ぐものの

峡に生れた鳥でさへ
一度は里へ出るものを

男と生れ世の中の
荒い波風知らないで
空しく此處に死れやうか
男と生れ一度は
世を驚ろかす大業を

爲さずにこの眼が瞑れよか

頼りにされたこのからだ
蹴れた姉を劬つて
この谷かげに事もなく
日を暮しては居たいけど

「姉さん僕はこゝを出て

立派になつて歸ります」
悲しむ姉に背を向けて
僕はきつぱり言切つた
みどりの空を鳥がゆく
鳥さへ里へゆくものを

母を尋ねて

暗い波間を分けながら
月がのぼつたほのぼのと
月の光りのあるうちに
母在す島へ漕いで行かう

家をこつそり抜け出して
誰も知らない岩陰に
繋いで置いた舟にのり
島をはなれるそのわけは
「母戀しさ」というたなら
父も許して下さらう

十四の年をとるまでに

生みの母親しらないで
育てられてた淋しさは
ほかの人にはわからない

はじめて學校に通ふ頃
どうして母がないのかと
父に訊れた事もある
「母はお前が生れると

すぐにあの世へ行つたのだ」
父はこれだけ言つたきり

ところが去年の夏のこと
村の祭があつたとき
おどけ芝居の看板の
前にぼんやり立つてると